

哲学入門

ヤスパース



新潮文庫

Title : EINFÜHRUNG IN DIE PHILOSOFIE

Author : Karl Jaspers

てつ がつ にゆう もん
哲 学 入 門

新潮文庫



昭和二十九年十二月二十五日 発行
昭和四十七年八月十日 二十九刷改版
平成元年七月五日 五十四刷

訳者 草薙正夫
くさなぎ まさお

発行者 佐藤亮一
さとう へいいち

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎 製本・加藤製本株式会社
© Masao Kusanagi 1954 Printed in Japan

ISBN4-10-203601-6 C0110

新潮文庫

哲学入門

ヤスパース
草薙正夫訳



新潮社版

723

目次

第一講	哲学とは何ぞや	セ
第二講	哲学の根源	二〇
第三講	包括者	三四
第四講	神の思想	四八
第五講	無制約的な要求	六六
第六講	人間	八一
第七講	世界	九六
第八講	信仰と啓蒙	一〇
第九講	人類の歴史	二四

第十講	哲学する人間の独立性……………	一四二
第十一講	哲学的な生活態度……………	一五四
第十二講	哲学の歴史……………	一六六
付録	はじめて哲学を学ぶ人びとのために……………	一八三
訳注・年譜・解説……………	草 薙 正 夫	三三

哲
学
入
門

第一講 哲学とは何ぞや

哲学に関しては見解が一致しない 哲学とは何ぞやとか、哲学にはどんな価値があるかなど

という問題についてはいろいろの見解があって、一致していないのであります。哲学に対して、私たちを非常に啓発してくれるものだという期待をかける人があるかと思うと、哲学を無内容な思惟^{しゐ}だとして無視する人もあります。また哲学は平凡な人間にはとても及ばないようなひどく骨の折れるものだと思って、これを敬遠したり、あるいは哲学は夢想家がやる無用な穿鑿^{せんさく}事として軽蔑^{けいべつ}したりする人があります。哲学は万人にかかわりをもつものであり、したがって元来平易で、わかりやすいものであらねばならないと考える人があるかと思うと、反対に哲学をひどくむずかしいものだと考えて、哲学の研究を諦^{あきら}めてかかる人があります。哲学という同じ名称を名のって出るものが、実際にはこのように対立した評価を示す数々の例証を生み出しているのであります。哲学が科学の信仰者にとってもっとも嫌悪^{けんお}される点は、哲学は普遍妥当的な成果を全然もたないということ、すなわち私たちが知り、それによって所有することができるようなあるものを全然もたないということです。科学が自己の領域において、いなみがたく確実で、一般的に

承認されるいろいろな知識を獲得しているのに反して、哲学は数千年の間の努力にもかかわらず、かつてこのような知識に到達したことがないのです。哲学には決定的に認識されたものの一致性というものがけっして存在しないという事実是否定できません。しかしなむことのできない根拠からして万人に承認されるものは、そのことによって科学的知識となったのでありますが、もはやそれは哲学ではないので、認識可能なもののある特殊な領域に関係するものであります。

また哲学的思惟には、科学のように、進歩発達の過程という性格がないのであります。確かに、私たちはギリシア時代の医者であったヒッポクラテースよりもはるかに進歩しています。しかし私たちはプラトーンよりも進歩しているとはいえないのです。私たちは、プラトーンに利用できなかった科学的認識の材料に関してだけなら、彼よりも進歩しているといえる。しかし「哲学すること」それ自身に関していえば、おそらく私たちはもう一度彼の水準に到達することはほとんどできないのではないでしょうか。

科学と異なつて、哲学の形態をとるかぎり、どんなものにも万人の一致した承認というものが欠けているという事実は、哲学という事柄の本性のうちに存しなければならぬことであります。哲学において獲得される確実性は、科学的な性質のもの、換言しますと、どの悟性にとつても同様な性質の確実性ではなくて、それが成功した場合に人間の全本質が参加してともに語りあうことができるといったような確認 (Vergewisserung) なのであります。科学的認識は何らかの個々の対象にかかわりをもち、そしてこれらの個々の対象について知ることばけっして万人にとって

必要であるわけではないのですが、哲学においては、人間としての人間にかかわる存在全体や、一度開明されたならば、どの科学的認識よりもいっそう深く人の心をとらえるところの真理が重要な問題となるのであります。

なるほど完全な哲学は科学と結合しており、またそれぞれの時代において到達された最高の状態にある科学を前提とするものではありませんが、しかし哲学の意味はそれと異なったある別の根源をもっております。哲学はあらゆる科学に先立って、人間が日ざめる場合に現われるのであります。

科学のない哲学 この科学と関連のない哲学がもっている特徴的な現象について二、三述べてみましょう。

第一に、哲学的な事柄については、ほとんどすべての人が何らかの判断をすることができると思っています。人は科学においては、学習や練習や方法が理解の条件であることを認めるのに、哲学に関しては、即座にそれに参加して、ともに談ずることができるのだということを主張します。この場合自分自身が人間であるということや、自分自身の運命や自分自身の経験が哲学に参加する前提条件として十分に通用するのであります。

哲学は万人が手にすることができねばならないものだという要求は、承認されねばならないのであります。哲学の専門家がたどりゆく迂余曲折うよきよくせつした哲学の道は、それが人間の存在へ通ずるか

ぎりにおいてのみ意義があるのであって、この場合人間の存在はこのような哲学において、存在と自己自身がいかに関係されるかということによって規定されているのであります。

第二に、哲学的思惟は、どんな場合でも、根源的であらねばなりません。人は誰でも哲学的思惟を自分自身で遂行せねばならないのです。

人間は人間であるかぎり、根源的に哲学するものであるという事実を示す驚くべき証拠は、子供によって発せられる問いであります。私たちが意義のうえからいって直接に「哲学すること」の根底に触れる事柄を、子供の口から聞くことは決して珍しいことではないのであります。つぎにそのいくつかの例を挙げてみましょう。

ある子供が不思議そうに言います、『僕はいつも、僕は他の人と同じ者であるんじゃないだろうかと考えてみるんだが、しかしやはりついに僕は僕なんだ』と。この少年はあらゆる確実性の根源、すなわち自己意識における存在意識、に触れているのであります。彼は他のものからはけっして理解されることのないものであるところの、この自己存在の謎なぞにぶっつかって驚くのです。彼はこの限界の前で問いにぶっつかるのであります。

またある子供が、はじめに神天と地を創つくりたまえり、という創世記の物語を聞いた。そうすると彼はすぐに『はじめの前にはいったい何があったのか』と問うたのであります。つまりこの少年は、問いには限界がないということ、知性を停止させることはできないということ、完結した答えというものはないということを経験したのであります。

ある子供がたまたま森の中の草地を散歩しながら、そこで夜な夜な踊り戯れる妖精ようせいの物語を聴いたとき、つぎのように言ったのであります。『でも妖精なんて本当はいないのよ』と。そこで今度は人は、この子供に現実の事柄について話してやります。太陽の運行を観察しながら、太陽が運動するのかそれとも地球が運動するのかという問いに答えたり、地球が球形であって、自転することを証明するいろいろな理由を挙げてやります。ところがその少女は『あら、それは全然嘘うそよ』と言って、土地を足で踏み鳴らし、『地球は確かに動かないわ、私は自分の目に見えることだけしか信じてないのよ』。そこで『じゃあなたは愛する神様がいらっしゃることを信じてないんだね。だって神様だって目に見えないじゃないか』と言ってやります。するとこの少女ははっとしたようであるが、そのつぎにはじつにきっぱりと『もし神様がいらっしゃらないとしたら、私たちだってきっと生きていないわ』と申しました。この子供は、現存在はそれ自らによって存在するのではないという、現存在の不可思議さによってとらえられたのです。そこでこの子供は、世界内のある事物が問題なのか、それとも存在と私たちの現存在との全体が問題なのかという問いの相違を理解したのであります。

またある少女が人を訪問するために階段を昇っていきます。そうするとこの少女の眼前であらゆる周囲の情景がたえず変化して、流れ去り、過ぎ去って行って、あたかもこれら小さいものは存在しなかったかのように思われる。『けれども何かある確かなことが存在しうるはずです……私が現在ここで叔母おばさんのもとへ行くために、階段を昇りつつあるのだという事実だけは、

どうしても手離したくない』。万物が必滅無常であるということに対する驚きと恐れは、ある一つの心もとない逃れ路を求めたものでありましよう。

もしこのような事例を蒐集しようと思えば、おそらく一冊の龐大な児童哲学の記録を作ることができるでしょう。それら子供たちはこれらのことを、以前に両親や他の人びとから聞いていたのだという抗議は、これらの真剣な考えにとつては全然通用しないことは明瞭であります。またこれらの子供はそれ以上に続けて哲学することはできないのだ、したがってこのような言葉は単に偶然でしかありえないのだなどという抗議は、子供の中には、しばしば成長するにつれて失われていくような天才的性質をそなえているものがあるという事実を看過しているのです。それはちょうど、私たちが年を取るに従って因襲や臆見や隠蔽や無疑問性などの虜になってしまつて、子供がもっているような、何ものにもとられない心を失っているようなものであります。子供はまだ自由に成長しつつある生命の状態のうちにあって、感じたり、見たり、問うたりしているのです。ただそれらの感ぜられたり、見られたり、問われたりした事柄が、間もなく消えていくまでのことなのであります。瞬間的に子供の心に顕現したことは忘却されていく。そして後年になつてから、彼らが語ったり、問うたりしたことを記録しておいた大人から聞かされて、びっくりするのであります。

第三——根源的な「哲学すること」は子供だけでなく、精神病者においても同様に現われています。まれにはあるが、ときとして一般的な偽装の束縛が解かれて、深刻な真理が語るかのよ

うに思われることがあります。多くの精神病の初期にあつては、人を感動さすような種類の形而上学的な啓示が生れるものであります。もっともこのような啓示においては、詩人のヘルダーリンや画家のヴァン・ゴッホの場合を除けば、たいがいはその形式や言葉は、その告知が客観的な意義をもつ資格のあるものではないのですが、このような啓示に接した人は、日常私たちの生活を覆い隠しているような、一種の覆いがこの場合打破されるという印象を、払いのけることができないのです。多くの健康な人でも、眠りから目がさめたとき、気味の悪いほど意味深いものを経験することを知っているのですが、それらは完全に目がさめているときは、ふたたび失われてしまつて、ただもはや我々はそれに徹底できないということを感じさせられるだけなのです。子供とばかりは眞実を語る、という諺には深い意味があるのであります。ただ、創造的な根源性は——偉大な哲学的思想はこの創造的な根源性に負っているのですが——そのようなところにあるのではなくして、少数の偉大な精神として何ものにもとらわれることなく、独自の立場をとつて数千年の間に出現したところの少数の人びとに存しているのであります。

第四——哲学は人間にとって避けることのできないものであるから、それは常に公開されているものであつて、言い伝えられてきた諺の中にもあれば、人口に膾炙した哲学的な文句の中にもあるし、教育の進んだ現代人の言葉や政治的信条に関する言葉のような、世間一般の主張の中にもあるものですが、特にそれは歴史が始まつて以来、神話の中に現われております。まことに哲学は避けられないものであります。ただ問題となることは、それが意識されているかいにか、

それが優れたものであるか、つまらないものであるか、わけのわからないものであるか、はっきりしたものであるかなどというだけのことです。哲学を拒否する者は、彼自らが一種の哲学を遂行しているのであって、ただ自分でそれを意識しないだけのことなのであります。

哲学の本質はいかに言い表わされるか　さてかくも一般的に、またかくも独特な形態をもつて現われる哲学とはいかなるものでありましょうか。

哲学者 (philosophos) というギリシア語は、学者 (sophos) と対立する言葉であって、知識をもつことによって知者と呼ばれる人と異なり、知識 (知) を愛する人を意味する言葉であります。この言葉の意味は現在まで維持されてきております。すなわちそれは独断主義の形態、換言しますと、いろいろな命題として言い表わされた究極決定的な、完全な、そして教訓的な知の形態、をとることに於いて、しばしばこの言葉の意義を裏切っているのでありますが、哲学の本質は真理を所有することではなくて、真理を探究することなのであります。哲学とは途上にあることを意味します。哲学の問いはその答えよりもいっそう重要であり、またあらゆる答えは新しい問いとなるのであります。

しかしこの途上にあること (Auf-dem-Wege-sein) —— 時間のうちに存する人間の運命 —— はそれ自身のうちに深い満足の可能性を隠しているのであります。特に高潮した完成の刹那せつなにおいてそのようなのです。このような可能性はけっして言葉で表わすことのできる知識や命題や認識のう

ちに存するのではなく、人間存在の歴史的な実現過程のうちに存するのであって、存在そのものはこの人間存在にとって現われ出るのであります。人間がそのつどおかれている状況のうちにこの現実をとらえることが「哲学すること」の意味なのであります。

探究しながら途上にあること、あるいは瞬間の安心と完成を発見すること、これらの言葉はけっして哲学の定義ではないのであります。哲学には縦の組織とか横の組織とかいうものはないのです。哲学はある他のものからは導き出されない。哲学はいずれも自己を実現することによって自らを定義する。哲学とは何であるかということは、私たちによって実験されなければならないことなのです。かくて哲学は生きた思想の実現であり、またこの思想への反省であります。あるいは哲学は、行為であり、この行為について語ることであります。自己自身の実験からして、はじめに私たちは、世界の中において私たちが哲学として出会うところのものを感得することができるのであります。

しかし私たちはさらにもっと多くの哲学の意味の型を示すことができます。しかしどんな型でも、哲学の意味を完全に尽しているものでもなければ、また唯一のものとして表わされるものでもありません。古代から伝えられているところによると、哲学とは（その対象に従っていえば）神的な事物や人間的な事物についての認識であり、存在者としての存在者の認識である。さらに（その目的に従っていえば）死の学びであり、思惟しゐによって淨福を得ようと努力すること、神的なものに似ることである。最後に哲学は（その包括的な意義に従っていえば）あらゆる知の知、